

アンケートによる留学生の動向 —留学の目的を中心に

清水百合

要旨

最も大きい変化があったのは、目的である。研究を目的としている滞在者が減り、修士、博士を取得すると答えたものが増えた。それにつれて日本語の必要性もぐんと増し、学生は早く上達し、目先の大学院試験、入ってからの講義、ゼミに備えようとしている。また30才以上の留学生が増えつつある。この高齢化は、春期は漢字圏、秋期は非漢字圏に多くなることも分かった。専門としては、経営学が最も多く、ついで日本語、日本文化が多い。医学、体育も増加傾向にある。

[キーワード] 漢字圏、非漢字圏、高齢化、目的、専門

1. はじめに

筑波大学留学生センターでは、86年度前期から同センターで日本語を学習する留学生を対象に、プレースメントテストに合わせてアンケート調査も始めた。アンケート（「資料1」参照）は、どのような外国語学習歴を持った学生がどのような目的を持って同センターに来たのということから、プレースメントテストの成績の要因の一部を探ること、また学習者のタイプというものを具体的に捉えることを目的としている。

今回は5期分、2年半という推移の中で、学生の年令、目的意識、その他に方向を見出したので、とりあえず中間報告のかたちでまとめてみた。センターの授業その他の参考にさせていただければ幸いである。

2. アンケートの内容

・属性 本人について

国籍、母語、年令、性別、専門、母国での職業

・外国語学習について

今回の来日以前の外国生活経験（国、期間、年令、社会的身分、主に使った言語）、母国の学校で学習した外国語（外国語名、何才から、何年、週何時間）、最も長く学習した外国語について（テープを使ったか、聴く、文法、話す、読む、書くなどについて具体的にどのようなことをしたか、授業の進め方）外国語学習者としての自己評価（目型、耳型、記憶力、速度、学習能力、英語力）

・日本語学習について

日本に来た理由、筑波大学での目的（修士、博士、研究）、現在までの滞日日数、来日前の日本語学習（有無、方法、時間数）滞日予定年数、いつ日本語を使うか（研究、生活、その他）

3. 分析のためのグループ分け

アンケートに回答した学生数は次のとおりである。

86年春 94名

86年秋 90名

87年春 95名

87年秋 60名

88年春 86名

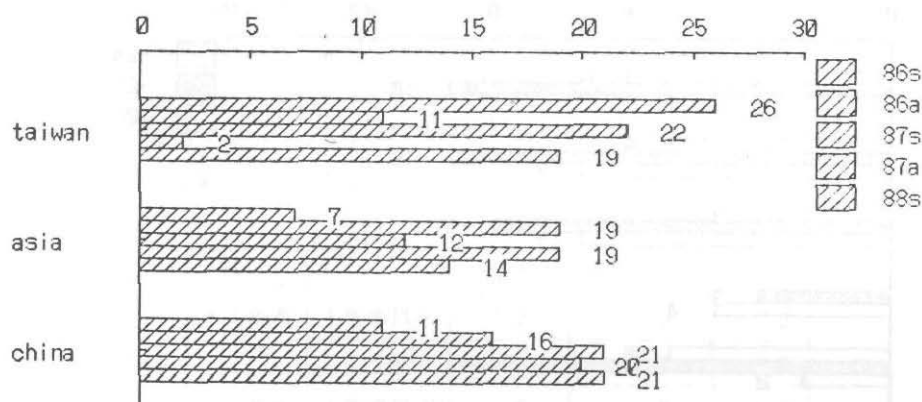
これらの学生を三つの漢字圏（韓国、台湾、中華人民共和国〔86年度前期に学生数の多い順〕）と二つの非漢字圏（アジア、その他）、計五つのグループに分けた。非漢字圏のグループ分けで、アジア、その他と分けたが、実際ずいぶん学習環境が異なるものを二つにしか分けられないのはすっきりしない。しかしここでは漢字圏、非漢字圏の区分を第一義とし、その次に非漢字圏の中でも地理的に比較的近い国々をアジア、遠い国をその他とした。

年令は三つに分けた。24才以下、25才以上29才以下、30才以上である。24才までは、大学卒業後わりにすぐに来日したもの、25才から29才までは卒業後ある程度働いたもの、30才以上は卒業後かなりの年数働いたものという考え方である。グラフや表の学生総数が異なるのは、アンケートの回答を得られたものだけを集計し、無回答のものは入っていないからである。

4. 国グループ、年令グループ、性別グループ

4.1 国グループの学生数

五つの国別グループの学生数は、学期によって2～26名でかなりの幅が見られるが、しかしそれらは大別すると春期集中型、秋期集中型、安定型に分けられる。春期集中型は台湾である。（図表1）秋期の2倍が春期にセンターに来る。逆に秋期集中型はアジアである。春期の25%増しになる。これは同センターでTコースと呼ばれる主にアジアからの教員の研修日本語コースが秋期に来日し一年後の秋期には、プレースメントテストを受けてBコースに入るという内的要因によると思われる。安定型は中国、韓国、その他である。これらは学期による数の変動は見られない。安定型の中でも、中国は増加傾向、韓国は減少傾向にある。その他は増えたり減ったりしている。

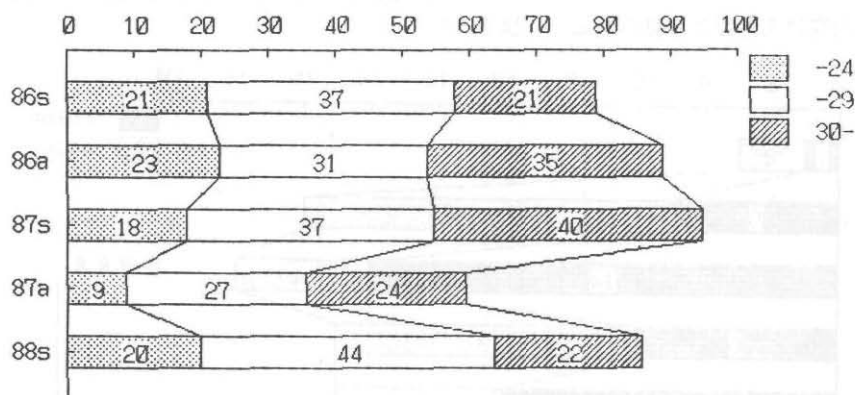


図表1 学生数の学期別タイプ：春期集中型、秋期集中型、安定型

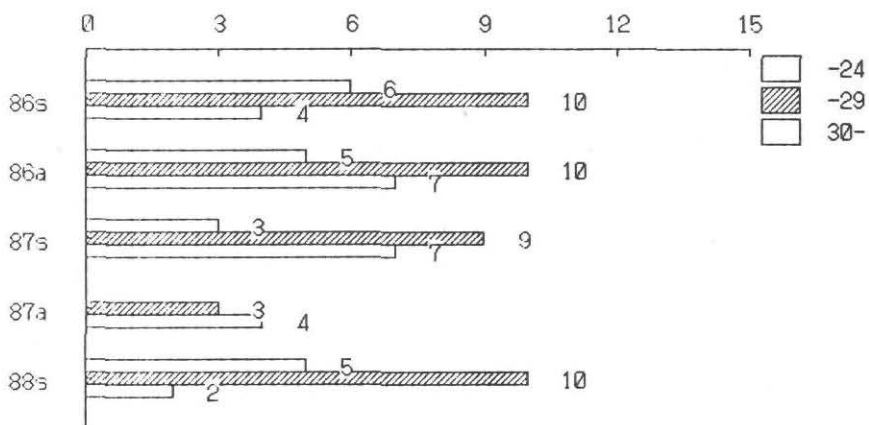
全体的に言って春期は、漢字圏対非漢字圏は65%対35%で、秋期は55%対45%になる。これは春期は読めるが話せない傾向、秋期は読めないが話せる傾向でクラスが始まると予測される要因の一つである。

4.2 年齢グループ

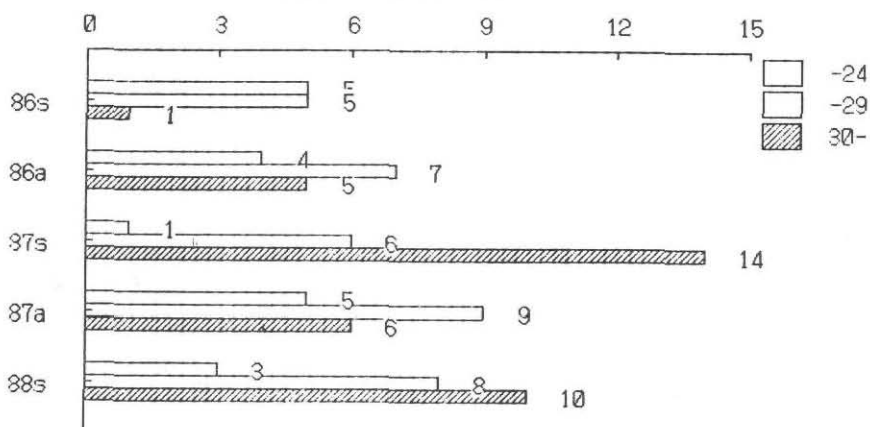
どの学期も25才から29才までの年齢層が全体の約40%から50%で、わりに安定している。また24才以下の学生もほぼ20名で、大きな変化は見られない。しかし30才以上の学生については86年春から87年秋にかけて急増し、その後は不安定な動きを見せている。(図表2) まず韓国は25-29才の層が最も厚く、グラフで24才以下、30才以上と比べると「山型」の中心突起型になっている。(図表3) それにひきかえ中国は春期は30才以上が最も多い「上り階段型」秋期は韓国と同じ「山型」である。(図表4)



図表2 学生の年齢別数

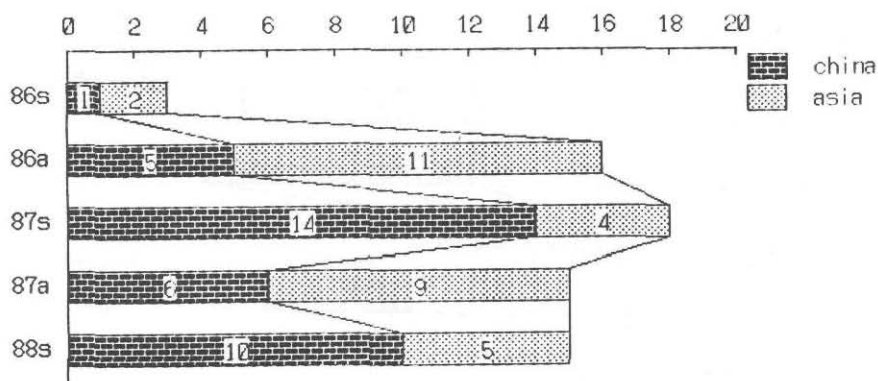


図表3 韓国の年齢層



図表4 中国の年齢層

また図表2で見ると87年秋と88年春の30才以上の学生数はほぼ同じだが、これをさらに国別で見るとその内容に大きな差が見られる。(図表5)



図表5 30才以上の学生数、中国とアジアの比

つまり30才以上の学生数は、中国は春期に多く、アジアは秋期に多い。

先ほどの学生数の国別、年令別の増減傾向は、過去2年半、台湾の春期集中傾向と中国、アジアの30才以上の学生の上記の変化に左右されたものである。

またこれらの年令グループの日本語学習歴（1年以下、2年以上）とプレースメントテストによる合計が平均点（学期によって異なるがほぼ75点）より上か下かを見た。

		—24才	25—29	30—
87年春	1年半以下	12	16	22
	1年半以上	6	21	18
87年秋	1年半以下	6	8	17
	1年半以上	3	19	7
88年春	1年半以下	7	18	10
	1年半以上	13	26	12

表1 年令別、日本語学習年数別の学生数

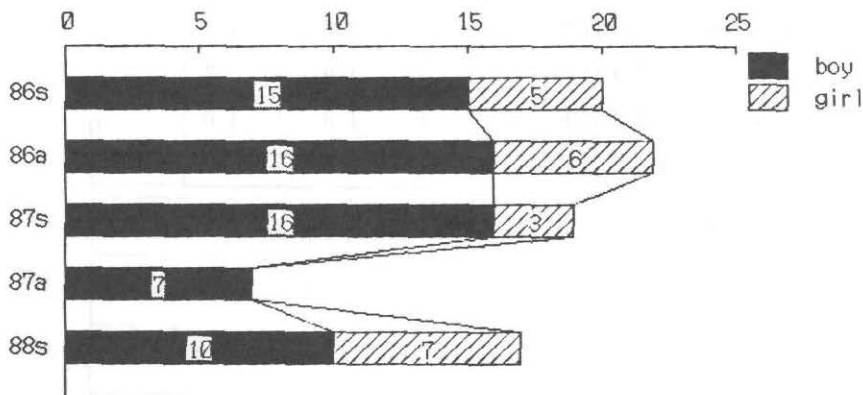
		—24才	25—29	30—	
87年春	1年半以下	7 ----- 5	4 ----- 12	7 ----- 15	--75点-- ----- 以上 ----- 以下
		6 ----- 0	18 ----- 3	11 ----- 7	--75点-- ----- 以上 ----- 以下
87年秋	1年半以下	4 ----- 2	3 ----- 5	1 ----- 16	--75点-- ----- 以上 ----- 以下
		3 ----- 0	14 ----- 5	5 ----- 2	--75点-- ----- 以上 ----- 以下
88年春	1年半以下	3 ----- 4	5 ----- 13	1 ----- 9	--75点-- ----- 以上 ----- 以下
		11 ----- 2	21 ----- 5	11 ----- 1	--75点-- ----- 以上 ----- 以下

表2 年令別の日本語学習年数とプレースメントテストの結果

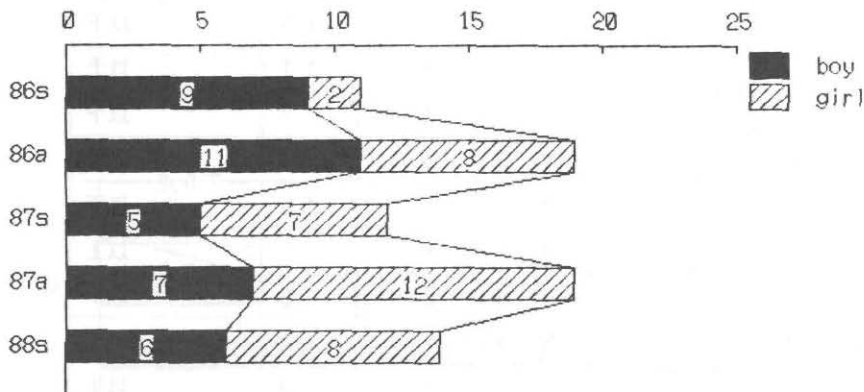
これによれば年令が高い低いで日本語学習年数に長い短いがあるわけでも、またプレースメントテストでの結果に著しい影響がでるわけではないことがよく分かる。むしろテストの結果と学習年数の相関がある。

4.3 男女別グループ

全体的には、男女比が6対4である。その中で差が著しいのは、韓国で86年には、女子が25%、87年（秋期略）には27%であった（図表6）。88年になって急に70%になったが、それでもアジアと比べると対照的である。アジアは女子が男子を上回る唯一のグループである。（図表7）これはやはり前にも述べたTコースの移動に起因していると思われる。



図表6 韓国の学生の男女比



図表7 アジアの学生の男女比

5 目的と専門

同センターで日本語を勉強する目的（修士、博士、研究）と専門（大別して九つ）の傾向もはっ

きりしてきた。専門は次のようにグループ分けした。

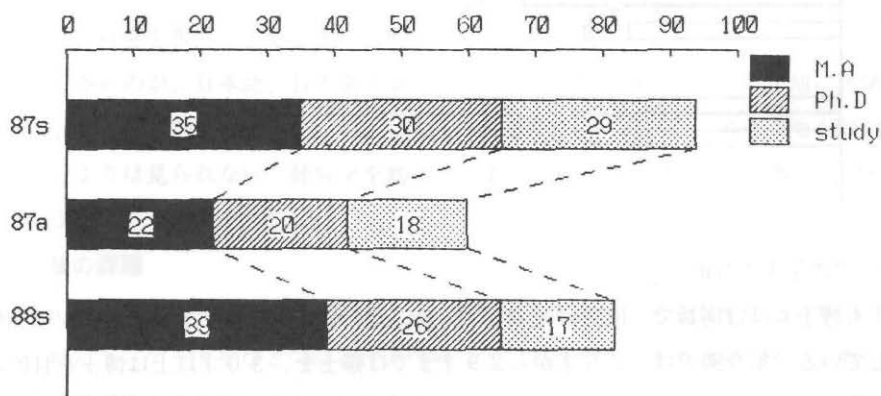
- group 1 経営、経済、政治、教育
- group 2 文学、言語学、哲学、歴史
- group 3 医学、生物学、地理学、物理学、化学
- group 4 体育、芸術、建築
- group 5 その他

なお86年度のデータのこの部分は、入力の際で不備なところがあったので、正確を記すために今回は比較の対象からはずした。

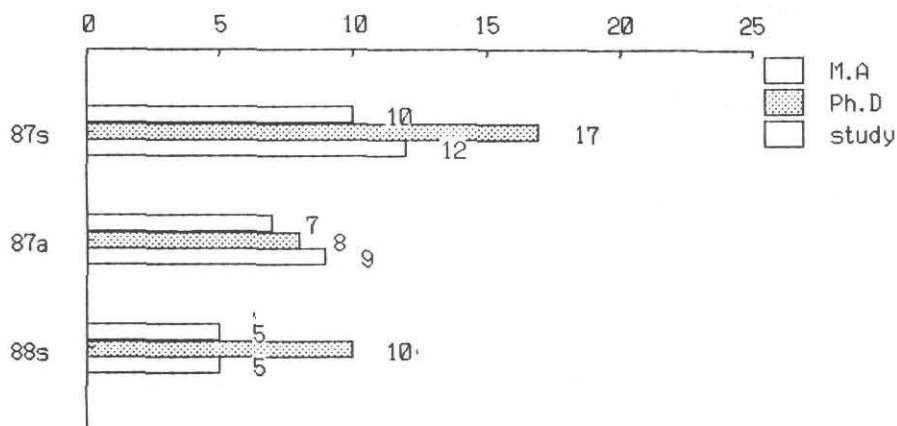
5.1 目的

最も顕著な変化は、研究を目的にしている学生が減少したことである。そしてその代わり修士を目的にする学生が増えた。博士を目的にする学生数に大きな変化は見られない。(図表8)

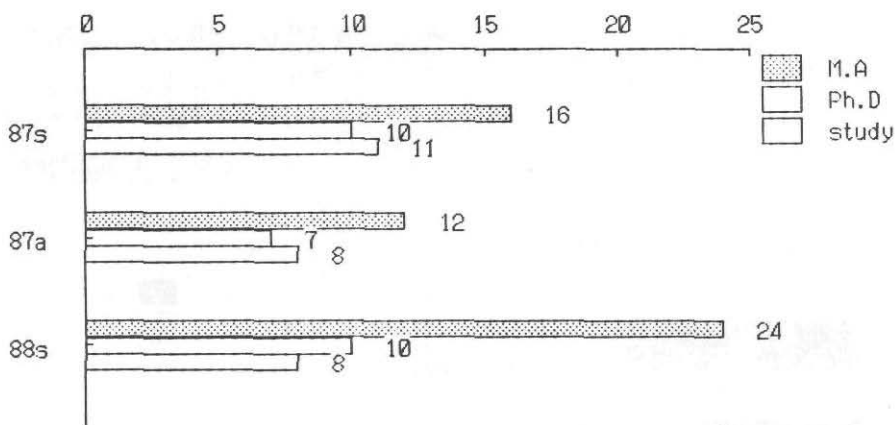
これもまた国別に、年齢別に特色がある。まず国別では、韓国の学生で博士を目指しているものが修士を目指しているものより多い。(図表9) 逆に台湾とアジアでは、修士と答えた学生が圧倒的に多く、博士は少ない。(図表10)



図表8 目的：修士、博士、研究



図表9 韓国の学生の目的



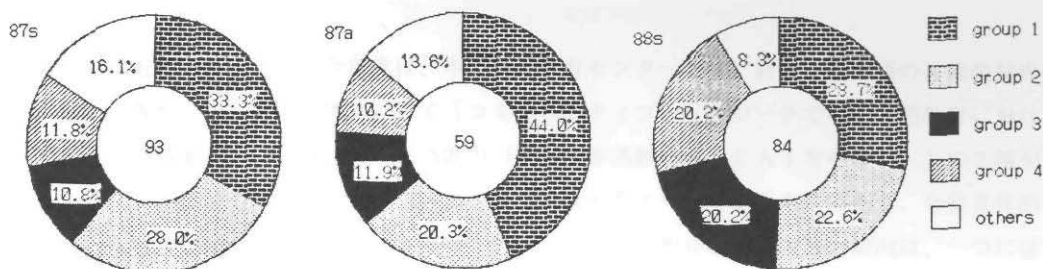
図表10 アジアの学生の目的

中国は、修士も博士もほぼ同数で、研究は減少している。その他のグループでは、修士が増加傾向、研究が激減している。年齢別では、25才から29才までは修士を、30才以上は博士を目的にしている学生が多い。

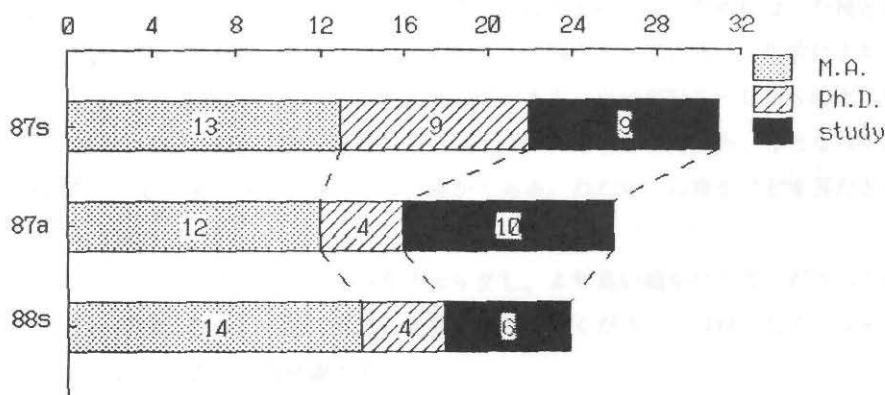
このように目的がはっきりしてきた理由としては、自分が目指している修士や博士を取得した同国者が周囲にいるか、あるいは取得しようとしている友人がいて、自分もやってみようという気になれる自然な雰囲気ができあがってきたことが考えられる。

5.2 専門

専門は経営学(group 1)と答えた学生が一番多く、「経済大国日本」で経営を勉強するのが、いかに留学生にとっては魅力か納得させられる。全体の3分の1が経営を専門にしている。(図表11)



図表 1 1 専門：経営、日本語、その他



図表 1 2 経営を専門とする学生の目的

ついで多いのが、日本語、日本文化(group 2)でこの数は安定している。他に医学(group 3)や体育(group 4)も増加傾向にある。最も人気のある経営は、漢字圏、非漢字圏を問わず、また年令にもかたよりは見られない。経営学を勉強する上での目的は、修士が最も多く、次が研究である。博士は少ない。(図表 1 2)

6 今後の課題

日頃、我々日本語教師は、日本語力という観点からしか留学生を見ていないが、このように回答してくれたアンケートをひとつひとつ見ていくと、それぞれの夢や希望がかいま見られて楽しかった。今回は属性と目的しかまとめられなかったが、データ量を多くなったことではあるし、秋までにこの続きをまとめたく思っている。外国語学習歴と日本語学習の相関、日本語学習へのイメージをブレスメントテストに出た結果から探って、いよいよ目型、耳型に分けられるかということろまでいきたいと夢をふくらませている。

参考文献

1. 安田三郎 (1982) 「社会調査ハンドブック」 有斐閣双書
2. 三宅一郎・山本嘉一郎 (1985) 「SPSS統計パッケージⅠ 基礎編」

東洋経済新聞社